

明治期のキリスト教と教育事業
～カトリックを事例に～

Christianity in Japanese Education of the Meiji Era
—In the case of Catholicism—

佐藤 快信、菅原 良子、入江 詩子
Yoshinobu Sato Yoshiko Sugawara Tomoko Irie

長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要
10巻1号

Bulletin of the Research Institute of Regional Area Study
Nagasaki Wesleyan University
2012年3月

明治期のキリスト教と教育事業*

～カトリックを事例に～

佐藤快信**、菅原良子**、入江詩子**

Christianity in Japanese Education of the Meiji Era

— In the case of Catholicism —

Yoshinobu Sato, Yoshiko Sugawara, Tomoko Irie

キーワード：カトリック、教育、ド・ロ神父、明治期、キリスト教

概要：

本報告では、ド・ロ神父の活動の背景を明らかにするために明治期のキリスト教カトリックの動きと教育事業・育児事業の動きを概観し考察した。パリ外国宣教会は、司祭の養成のための神学校は重要であるが、その前段階としての学校教育の重要性を認識していて、宣教初期には学校から始まってそこに教会が設置されるケースが多かった。ただ、カトリックは教育事業よりも慈善事業の方が優先され、プロテスタントよりも事業の開始は遅れた。ド・ロ神父が外海で開設した出津保育所は、日本で最初の保育所ともいえる先駆的なものであった。また、児童を対象とする学校も開設するが、神学校の前段階としての学校の位置づけというよりも貧困からの自立を助けるための教育の必要性を認識していたと推測できる。

はじめに

パリ外国宣教会に所属するフランス人神父であるド・ロ神父は、1868（明治元）年に長崎に上陸した。それからのド・ロ神父の活動は、印刷・出版事業、教会建築、開墾、道路工事、防波堤建築などの土木工事、社会福祉施設事業、医療・救護活動、本来の布教・司牧活動など多岐にわたった。特に、長崎県外海においての活動は、現在の地域開発の視点からみれば、社会開発的側面と経済開発的側面を兼ね備えた農村開発として評価できるだろう。

これまでに、幕末から明治期にかけて再布教を担ったパリ外国宣教会の宣教方針を明らかにすることで、外海におけるド・ロ神父の活動の意義の評価を試みた結果¹、パリ外国宣教会の方針は、①

生国と異なる国での宣教、②派遣先に一生留まり骨を埋める、③福音の伝わっていない人々の間に積極的に宣教する、というものであった。特に、外国での宣教の推進のためには、現地司祭の養成が重要とし邦人司祭の育成に力を入れていたことがわかった。また、明治期の宣教において、カトリックとプロテスタントではアプローチが異なり、プロテスタントが都市部で知識階級に取り入り、お抱え教師として浸透していったのに対し、カトリックは過去の迫害の経験から地方を中心に教育と社会事業を中心に浸透していった。パリ外国宣教会は、司祭の養成のための神学校は重要であるが、その前段階としての学校教育の重要性を認識していて、宣教初期には学校から始まってそこに教会が設置されるケースが多かった。

また、ド・ロ神父自らが西欧から農機具を購入し、その使い方、つくり方を教え、さらに西欧から種苗を購入し栽培し、住民と共に汗を流しながらそれらを伝えたことは、宣教を超えたものとしてあったのではないかと推測された²。

本報告では、さらにド・ロ神父の活動の背景を明らかにするために明治期のカトリックの教育事業、育児事業の動きを概観し、併せてド・ロ神父の事業についても考察した。なお、明治期のプロテスタントの動き³と社会福祉事業⁴に関しては、別に検討することとする。

1. 16世紀のカトリックの布教と学校教育

まず、1549（天文18）年にザビエルが鹿児島に上陸し、日本での布教を開始した。その時期の布教と教育の動きについて触れておく。

ザビエルが属していた修道会はイエズス会であることはよく知られている。イエズス会は前報⁵でも紹介したとおり、根本精神はキリストへの奉仕であり、目的として説教、霊操、福祉活動、青

* Received February 4, 2012

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 経済政策学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

少年・児童の教育などの面で活動し、神学、哲学、自然科学の分野に大きな貢献をした。

イエズス会の日本での布教方針は、この国の文化に順応しながら、無学であった庶民層にまず初歩的な教理を平易な解説で教えるものであった。そして、布教の基礎となる聖職者の養成と幼少期からの子どもの教育に力を注いだ。1550年代頃から、教会学校を設けキリスト教を基盤とした児童（男女）に対して初等教育をおこなった。1561年（永禄4）年、大分の布教所に最初の初等学校が設立された。責任者である伝導老長コスメ・デ・トーレスは、キリスト教徒となった両親に子どもはすべてこの学校に通わせるように命じている⁶。1562年には長崎県横瀬浦に、1580（天正8）年には西日本で約200校に達したといわれる⁷。

1579（天正7）年に来日したヴァリニャーノ司祭によって学校制度が組織され、日本の風習に順応しながら初等教育、セミナリヨ（中等）、コレジヨ（神学校）の教育機関を設置するなど革新的な教育をおこなった。初等教育は、全日制で教授科目は「読み方」、「書き方」、「宗教」、「唱歌」、「作法」などで信仰、道徳、修養など人間を育てることに重点を置いていた。児童数は、大分で40～50人、島原で70人程度、口之津では60人、有馬では100人を超えたとされる⁸。

児童の教育への関心は、カトリックの布教において、家庭は子孫の養育と救霊という神聖な目的を持っており、子ども中心の愛情ある家庭を尊重する背景があり、教理の「ドチリナ・キリシタン」ではこのことについて特に多くのページを割いている。学校教育ではないが、ルイス・アルメイダが1555年に大分で育児院を開設している。農村では貧困のために多くの墮胎や間引きがおこなわれており、その習慣を何とかやめさせようと豊後の領主 大友宗麟の援助を受けて開設した。これは、日本で最初の小児科医院の設備を持つ児童福祉視閲であったといわれる。そこで病人の世話にあたる信者たちによって、1559年に「慈愛の組」（ミゼリコルディア）が組織され、その後長崎、山口、京都など各地で医療、救貧、寡婦などの保健事業と孤児と捨て子の養育がおこなわれていった。

こうした宣教師たちの子どもたちへの深い愛情と日本の習俗を理解しようとする謙虚な布教方針は多くの信者や子どもたちを育てることにつながっていった。また、初等教育では日本の事業を鑑み寺子屋教科書が早くから用いられ、日本文化を取り入れながら幼少期から広く庶民的地盤を養

成したことは異質の思想や文化を、宣教のちに受容せしめることに大きく貢献した。しかし、イエズス会による学校教育は、1575年～1612年頃に最盛期を迎えかなり成功をおさめたが、その後は度重なる戦乱と豊臣秀吉による伴天連追放令によってキリシタン禁制の時代を迎え消失してしまった。

しかし、2世紀におよぶ禁教のあとに再来し根付いていくキリスト教へ、宣教の先駆的な地盤を日本に浸透させ、西洋の文化、科学、教育、社会福祉事業に先駆的役割を果たしてきたカトリック宣教師の功績は大きいものだったといえよう。

2. 幕末から明治初期のカトリック宣教と教育

キリスト教の再来となった幕末期に日本で布教活動を開始したパリ外国宣教会は、16世紀に布教活動を展開したカトリック宣教師たちが日本社会全体をキリスト教化し、為政者をも改宗させたいと考えていたことへの批判精神から、できるだけ為政者と関係せずに民間のなかで展開する草の根的活動として布教活動を基本方針の一つとしていた。そのため、初期は宣教師の身の安全と活動条件の改善のため、フランスをはじめとする諸外国の権力に依存したり日本政府に交渉したりしたが、明治8年頃から農村部の一般庶民に対する伝導を開始し、次第に自主的な草の根的宣教活動の輪を拡大していった。

一方、プロテスタント諸派の宣教師は、幕末から日本の近代化を望み有能な青年たちに対する聖書を教材に使った教育を始め、明治初期には各地に学校を創立させ、近代国家日本を担う有能な人材の教育を展開していった。そして、彼らに間に政治・社会文化活動の根幹となるキリスト教信仰と聖書研究を広めていった⁹。

パリ外国宣教会は、日本の急速な近代化には批判的であり、青山¹⁰はその背景について「この頃のフランスの貴族や高位聖職者の間に1870年のドイツとの戦争に敗れて重税を取り立てようとする共和党政府に対する批判が激しく、民主主義や近代精神は教会と信仰の敵である、とする声が高かったこと、並びに宣教師へのフランスからの支援金が減少し、反教會的なフランス政府の近代精神に対する不満が大きくなっていった」があることを指摘している。

そのため、カトリック宣教師たちは、自分たちの宣教対象にある地域社会を、まだ強すぎる異教徒的因習から解放し、宣教条件を有利にするため

の地方の近代化にだけ積極的であったのではないかと考えられる。その一例として、ド・ロ神父が長崎県外海町でおこなった教会建築、開墾、道路工事、防波堤建築などの土木工事、社会福祉施設事業、医療・救護活動と、本来の布教・司牧活動などの活動がある。

パリ外国宣教会は、それぞれの宣教地において、学校教育を重要視していた。それは、パリ外国宣教会の創設において現地人の司祭の養成という目的があり、司祭の養成は、神学校を設置すればすむという単純な問題ではなく、神学校の教育を成立させるための前段階としての学校教育が必要であったことや神学校に入学を希望する生徒をどこからどのように見つけ出すかという問題もあった。

1865年に信徒が長崎で発見されたときから、宣教師たちは司祭養成の課題に取り組んでいた。キリスト教禁制が強められていた頃、プチジャン司祭は大浦の司祭館の屋根裏に神学生10人をかくまい、1868年7月クーザン、ポアリエ両神父の協力のもと彼らを長崎から脱出させマレー半島のピナンの神学校に避難させた。1872年4月上海のペナン神学校に避難していた日本人神学生が日本の横浜に戻り、番町のラテン学校に入った。その頃のプチジャン司教の書簡には、首都江戸でヨーロッパ語学習のための学校を1つ持っており、すでに200人以上の学生がおり、フランス語、英語、ドイツ語を教えていることや江戸や横浜で病人の世話と幼少年者の教育、特に女子教育のために修道会経営の施設を設置しようとしていた¹¹ことがわかる。

パリ外国宣教会が初期に開設した学校には、神学校以外にも外国人居留地の子女のための学校、日本人対象の外国語学校などがあり、1871年の横浜天主堂外国塾、1872年の神戸ピリオン語学校、横浜ラテン語学校、1874年の高知仏語塾、1875年の弘前仏語塾、1876年の猿楽町邦学・外国語学校(のちの東京神学校)などがある。宣教初期においては、学校が教会に付属して開設されるケースよりも、学校から始まってそこに教会が設置されていたケースが多かった。例えば、1876年の八王子一分村教会学校、1877年の浅草猿屋町の玫瑰(まいかい)塾(浅草教会の前身)、海星学校、海星女学校、光起小学校、海星学校男子部など、1883年の仙台元寺小路教会の小学校、1890年の盛岡信愛小学校などの例がある。

3. サン・モール修道会の動き

江戸幕府は、1859年に横浜、長崎、函館を開港し、欧米諸国との貿易が開始した。横浜は、江戸に近いこともあって最大の貿易港として発展した。その繁栄の陰には、混血児が社会問題化し、捨て子や孤児、貧困にあえぐ人々が多く続出した。こうした状況にパリ外国宣教会のプチジャン神父は心を痛み、捨て子や孤児を司教館や信者の家庭に委託し養育をさせていた。かれらに愛情を持って世話をする母親を与えたいと願い、サン・モール修道会に手紙を送り、その結果1872年にマチルド帆は4名の修道女がマレーを出発し、日本に最初に来た修道女となった。彼女たちが日本に降り立った日、6月28日はサン・モール修道会創立の日であり、孤児院、無月謝学校、雙葉学園などの児童福祉事業、女子教育への始まりの日であった。彼女たちは、女子教育への早期着手を願いながら目の前に差し迫った課題である社会事業から着手することになった¹²。プロテスタントは早くから教育事業に着手したが、カトリックは社会事業から着手したことになる。

サン・モール修道会は、1662年に北フランスのルアンのミニム修道会の神父ニコラ・ナレが、ルアン近郊のソットビル村に開いた学校が発祥となっている。当初から、一般庶民の子女、特に貧しい家庭の子どもたちに教育を授けることが主な事業目的であった。国外宣教の機運が高まるなかで1851年にマレーへの派遣を皮切りに、ペナン、シンガポール、マラッカに修道院や孤児院を設立していた。

彼女たちは、居留地に住む外国人の比較的良家の子女たちに対し有料での教育をおこない、日本人孤児や生活困窮者の子どもたちの教育を目的とした無料の施設を開設した。特に、後者の横浜の施設は、「仁慈堂」(のちの「董女学校」と呼ばれ、山手83番地に横浜で最初の孤児院であった。しかし、修道会自体が期待するほど成果は上がっていなかった。それは、東アジアでの社会事業と異なり、修道会で引き取った孤児をキリスト者として育てることが困難であったこと、その運営費用は高額でその費用に充てられる有料の教育事業への一般日本人の父母たちが預けることへの躊躇があったためである。社会事業と教育事業の両立を果たすことは困難で、カトリック司教座のオズーフ司教は、サン・モール修道会のパリ本部に対し、女子教育それも上層階層を対象とした教育の展開の必要性を書き送っている。一般語学学校

の出入り口と孤児院とはできるだけ離す工夫などを試みている。結局、1908（明治41）年の雙葉高等女学校の設立、麴町への移転に伴い、孤児たちは横浜の菫小学校に移っていった。小山¹³によれば、少なくとも明治末まで教育事業と社会事業は分離せずにおこなわれていたと指摘している。

サン・モール修道会の教育実績が識者の間に高く評価されるようになり、居留地を出て貴族や上流婦人たちにフランス語や英語を教える語学校を開いてほしいと要望が高まっていた。当時鹿鳴館時代であって人々は欧米の言葉や文化を学ぶ風潮や熱意が強かった。1897（明治30）年に、帝国大学教授の長井長義博士を校長とし、鍋島、西郷、前田侯爵夫人らが後援者となり「雙葉会」が創設された。時間割は、華族女学校、女子高等師範の生徒たちも受けられるように工夫がなされていた。このように明治30年頃からサン・モール修道会は、来日当初の社会事業から女子教育へと転換していった。

1899（明治32）年に政府は高等女学校令を公布し、同時に教育宗教分離令を出した。そのことによって、宗教教育を残し各種学校のままで続けるか、宗教教育をおこなわず高等女学校として続けるかの決断を迫られた。女子高等師範学校校長の高嶺秀夫の進言に従って高等女子学校を選択し、1909（明治42）年に私立雙葉高等女学校として設立認可された。1910（明治43）年に小学校と幼稚園を設立した。日本におけるカトリック系の幼稚園は年代的にはプロテスタント系に比べ遅れて開設されており、最初のカトリック系の幼稚園は1904（明治37）年に創立された仏英和高等女学校（現 白百合学園）附属幼稚園である。1908（明治41）年にフランス修道院を起源に持つ聖心会の修道女が来日し、同年4月に聖心女子学院語学校を開設している。

4. カトリックの教育事業

学校教育に関しては、明治5（1874）年の太政官仰出書によって小学校教育が全国的に普及し始めると、異教徒の教員による教育を受けさせるよりはと、信徒の多い長崎県をはじめとして各地に現在の私立小学校を設立していった。佐々木¹⁴によれば、江戸末期（1858年）から明治末期（1912年）の間のカトリック教育機関の設立状況は、小学校5校、中学校13校、高等学校14校となっている。

1881年に、シャルトルの聖パウロ修道女会の東京小学校（のちの聖葆祿女学校、白百合学園）、1882年にショファイユの幼きイエズス会の長崎セントアンファンズ、1884年に大阪の西洋女子技芸学校（大阪信愛女学院）、1885年に京都の西洋手芸塾、1889年に岡山玫瑰女学校（岡山清心女学院）、1890年に浦上の三成女児尋常小学校、1888年にマリア会の暁星学校（暁星学園）が設立されている。

秋枝¹⁵は、明治期のプロテスタント系のミッション・スクールの数を整理しているので、それを以下に示す（表1）。

この表から、明治期に最終的に男子校は15校、女子校は42校が存在し、女子教育が中心である。その背景は、その多くはアメリカのプロテスタント諸派ミッションを中心に多くが設立されており、女性宣教師が設立に大きく関わっていたことによる。

カトリックの中等教育はフランス系の女子修道会によって進められ、男子の中等教育はフランスから修道士教育修道会であるマリア会を招致し1888（明治21）年に東京で創立された暁星学校が設立されている。初期の暁星学校ではマリア会員の負担が大きく、ヘンリック神父は日本人カトリック教師の協力と教員を養成するカトリックの師範学校が必要と考え本部に要請した。その結果、長崎教区長クーザン司教は「今、長崎にはプロテ

表 1. 明治期のプロテスタント系のミッション・スクールの学校数¹⁵

時 期	男子校			女子校		
	新設	閉校・転学	差引	新設	閉校・転学・合併	差引
1870 (M 3)	0	0	0	2	0	2
～1879 (M12)	5	1	4	15	3	12
～1889 (M22)	13	1	12	35	2	33
～1899 (M32)	4	6	- 2	6	12	- 6
～1912 (M45)	2	1	1	2	1	1
合 計	24	9	15	60	18	42

スタントの学校が三つあります。しかし、カトリックの学校はありません。あるのは小さな神学校と海岸通りにあるショファイユの幼きイエズス修道女会の孤児院兼小さな女学校だけです。長崎の人たちは、信者、未信者を問わず、真理を探究するカトリックの男子校を望んでいるのです。」と助言している。その後、バルツ神父が長崎に派遣され「海星」と名付けられた長崎の学校は1892（明治25）年9月に開校した。1898（明治31）年大阪に病院跡を借りて始まった教育事業は成人の夜間学校で「明星」と呼ばれた。

カトリックの教育事業が本格化するのには、プロテスタントに比べかなり遅れており、その背景には慈善事業を優先させていたことがあった。青山¹⁶は、「近代日本を形成発展させる指導的インテリの養成ではなく、カトリックの伝統に批判的な欧米の近代思想、並びにそれを摂取しながら成長した日本の近代精神に対して一線を画し、そういう思想や精神が風潮する近代化社会のなかで、密かにカトリックの伝統を重んじ神信仰に忠実に生きようとする、一種の草の根的教育を続けていたことにはそれなりの長所もあったように思う」と評価している。

5. 育児事業

角野¹⁷は、「カトリック教会は布教部と慈善部がそれぞれ独立し、組織的かつ相互連絡を保ちながら活動がおこなわれ、慈善部は、育児事業、医療、養老員などの福祉的事業に力を注ぎ、それら事業の中でも最も早く設立されたのは育児事業であった」と述べている。1872年（明治5）年の董女学校、1874（明治7）年の浦上養育院、1887年（明治20）年までに9か所の施設があった¹⁸。先に取り上げたサン・モール修道会の育児事業のように主にこうした育児事業はカトリックが営んでいた。その指導者は、主にフランスン神父や修道女たちであった。

日本人により私経営の育児事業は1879（明治12）年に東京で設立された福田会育児院、1886（明治19）年に大阪で設立された愛育社、1887年に岡山に設立された岡山孤児院の3か所であるが、日本人による最初の育児事業は岩永マキらの手による長崎の浦上養育院である。孤児の養育開始した彼女たちの共同生活は当初「女部屋」と呼ばれ、1877（明治10）年に修道会として組織され浦上十字会と命名された。その岩永マキを含めた修道女たちを指導し、自ら医療活動にも取り組んでいたのが、

ド・ロ神父¹⁹であった。浦上養育院と浦上十字会の活動が注目されるようになり、同じ志を持つ女性たちが長崎に集まり、岩永らのものと学び帰郷し、教区担当の神父を指導者として共同体や女子修道会を発足し、それを母体に育児事業を展開していった。1880（明治13）年に松浦郡有川村の態之浦養育院（創立者：ブレル神父）、奥浦村の奥浦村慈恵院（創立者：マルマン神父）、田崎の田崎愛苦会（創始者：マタラ神父）、1881（明治14）年に長崎センタンファン（マリア園）（創始者：サン・モール会）がある。

ド・ロ神父は、赴任先の外海で1885（明治18）年²⁰にイワシ網すき工場跡に「出津保育所」を設立している。出津託児所と名付けられたこの施設は、1935（昭和10）年に出津愛児園託児所、1966（昭和41）年には出津愛児園と改称され、現在に至っている。ここでは、2歳から10歳前後の男女の子どもを収容し、幼年組（2歳から6歳くらい）、少年組、少女組に分かれ、整列、唱歌、おはなし、読み書き、そろばん、屋外での自由遊び、祈り、聖歌、公教要理など宗教教育がなされた。この施設は保育所的性格よりも宗教教育を目的とした教会学校と貧児教育的な内容を初期には持っていた²¹とされるが、ド・ロ神父は子どもの世話や指導にあたる聖ヨゼフ会の修道女たちに「母の心を持って子どもに接するように」と教えていたというエピソードからも、母性的養育を重視したフレイベルの精神に通じる保育を実践していたとみられる。小林²²は、ド・ロ神父の出津保育所はフランスの保育所の規定にあてはまり、幼年組の内容的にみて保育所の機能を果たして年代からみて日本において先駆的なものであったとして日本最初の保育所としている。

ド・ロ神父は保育所を開設する前に1879（明治12）年に外海に赴任して最初に着手したのは学校の設立であった。その背景については、片岡²³は「ド・ロ神父が教育が人間をつくり、教育の大切さを知っていた」からとしている。その年の12月に彼の助手である中村近蔵の名で長崎県知事 内海忠勝に「私学校開設願」を提出している。1880（明治13）年のパリ外国宣教会の年次報告には「外海地区には、100人の男子生徒の通っている学校が二つあって、女学校も四つあり²⁴」と記されている。彼は文字の読めない村人が多いのを見て、読書の習慣を幼少期から身につけられる必要性を感じていた。彼は『智慧明ヶ乃道』を著しており、その教育法で注目されるのは勤勉の習慣を幼いころか

ら身につけさせることであり、自分のため他人のために働く習慣はその人の一生の財産であり、このため救助院の手伝いを子供たちに教え身につけさせようとした²⁵。

まとめ

これまでに、明治期のキリスト教カトリックの動きと教育事業・育児事業を概観してきた。その結果として、以下のようにまとめることができる。

- ① カトリックは、教育事業よりも慈善事業を優先させていた。そのため、プロテスタントよりも教育事業は遅れた。
- ② 慈善事業のなかの孤児・捨て子の養育にかかる育児事業が先行していた。そのため、日本で最初の保育所とみられる出津保育所がド・ロ神父によって長崎県外海に開設された。
- ③ 当時の宣教との関係で学校教育の必要性があったにせよド・ロ神父の場合は社会的弱者の自立を助けるものとして教育の重要性を認識し、実践していたという見方ができる。

カトリック内部における慈善事業の評価について、田代²⁶は「個々の宣教師や修道会が、必要と思われる事業を個々バラバラに始め、相互の間に連絡とか調整とかいったこともなく全国各地でおこなったのではないかと思われる。」と指摘している。その視点からみると、ド・ロ神父が出津保育所や学校を設立し外海に生涯を捧げた行為は、自らの価値観によって行動していたといえよう。

付記

本報告は、長崎ウエスレヤン大学 地域総合研究所の採択研究2011B 1（研究代表者：佐藤快信）の結果の一部である。

- ¹ 佐藤快信、「明治期の宣教師の社会事業の背景～イエズス会・パリ外国宣教会の宣教方針を基に～」、長崎ウエスレヤン大学 地域総合研究所 研究紀要、p.15-22、2011年。
- ² 佐藤快信、「ド・ロ神父と農業 —長崎県長崎市外海町の事例をもとに—」、地域文化研究、国立八戸工業高等専門学校、No.19、p.23-32、2011年。
- ³ 佐藤快信・菅原良子、「明治期のキリスト教と教育—プロテスタント事例に—」、地域文化研究、国立八戸工業高等専門学校、投稿中、2012年。

- ⁴ 村上 清、「ド・ロ神父の活動と社会背景」、長崎ウエスレヤン大学 地域総合研究所 研究紀要、投稿中。
- ⁵ 前掲 佐藤快信、「明治期の宣教師の社会事業の背景～イエズス会・パリ外国宣教会の宣教方針を基に～」。イエズス会に関しては、『日本キリスト教歴史大辞典』、教文館、p.82、1988年も参考。
- ⁶ シリング、岡本良知、『日本に於ける耶蘇会の学校制度』、大空社、p.57、1992年。
- ⁷ 長崎県教育委員会編、『長崎のキリシタン学校—セミナリヨ、コレジヨの跡を訪ねて—』、p.13、1987年。
- ⁸ 前掲、シリング、『日本に於ける耶蘇会の学校制度』、p.65
- ⁹ 同上。
- ¹⁰ 青山 玄、「明治以降の日本におけるカトリック校の教育とその問題点」、キリスト教史学、No.47、p.76-79、1993年。
- ¹¹ 佐々木慶照、『日本カトリック学校の歩み』、コルベ新書、聖母の騎士社、2010年。
- ¹² 小山彰子、「明治・近代女子教育覚え書き—さまざまな女子教育機関の誕生—」、哲学、慶応義塾大学、No.112、p.131-163、2004年。
- ¹³ 同上、p.150。
- ¹⁴ 前掲 佐々木慶照、『日本カトリック学校の歩み』、p.292。
- ¹⁵ 秋枝蕭子、「キリスト教系女子教育の研究のしおり」、文藝と思想、福岡女学院、p.52、No.25、1963年。
- ¹⁶ 前掲、青山玄、「明治以降の日本におけるカトリック校の教育とその問題点」。
- ¹⁷ 角野雅彦、「19世紀におけるキリスト教主義保育の需要と展開—宣教師たちの活動を中心として—」、四国学院論集、四国学院文化学会、p.1-32、No.123、2007年。
- ¹⁸ 生江孝之、『日本基督教社会事業史』、教文館、p.76、1931年。
- ¹⁹ 谷 真介、『外海の聖者 ド・ロ神父』、女子パウロ会、p.46、1986年 によれば、ド・ロ神父は1873年まで横浜に滞在しており、その間に建築技師としてサン・モール修道会の宿舎建設に関わっていた。
- ²⁰ 「ド・ロ神父記念館」発行の『マルコ・マリ・ド・ロ神父略伝』には1885（明治18）年に保育所を開設とあり、片岡弥吉著の『ある明治の福祉像』では「明治19年に保育所を設けた」となっている。クーザン司教報告（1886年度）に保育所の記述があり、記事は前縁の事を記載することから、1885年と推測される。
- ²¹ 矢島浩、『明治期日本基督社会事業施設史研究』、雄山閣出版、p.18、1982年。
- ²² 小林恵子、『日本の幼児教育につくした宣教師 上巻』、キリスト新聞社、p.69、2003年。

- ²³ 片岡弥吉、『ある明治の福祉像ード・ロ神父の生涯ー』、NHKブックス、日本放送協会、p.145、1977年。
- ²⁴ 松村管和・女子カルメル修道会共訳、『パリ外国宣教会年次報告 I』、聖母の騎士社、p.63、1996年。
- ²⁵ 前掲、小林恵子、『日本の幼児教育につくした宣教師上巻』、p.66、2003年。
- ²⁶ 田代菊雄、『日本カトリック社会事業史研究』、法律文化社、p.88-90、1989年。

